

青い環
浮海啓



青い環

浮海啓

《著者略歴》

浮海 啓（うきがい・さとる）

昭和12年(1937)静岡県に生まれる／37年に北川透氏と
 <あんかるわ>誌を創刊／38年から<試行>誌に創作
 を発表、現在に至る／著書に、試行小説集『序曲』共著
 (試行出版部),『夢の軋み』(泰流社)他がある。
 現住所／東京都小金井市東町3-12-18

青
い
環

定価 一八〇〇円

一九八六年二月一日 発行

著 者 浮 海 啓

発行者 土 岡 忍

発行所 白 地 社

〒六〇〇 京都市下京区綾小路通岩上角 飯田ビル2F
 電話(〇七五)八一—五五八七
 振替 京都二—三四三六七

正美社印刷機
 広瀬兼文堂

落し丁本はお取りかえいたしません

— 青い環 — 目次 —

I

燐寸

9

青い環

1
8

靄の中に

2
9

II

朝靄

3
7

変異

6
5

冬の幻

8
2

Ⅲ

パスカルの帯——95

夢の標——112

夜の海へ——137

固執記——159

鳴る雲——171

砂の嵐——186

砂丘——202

俯瞰——217

白湯

2
2
9

時の翹

2
4
2

覚書・北川透

2
5
7

あとがき

2
6
6

装幀・倉本修

青 い 環

燐寸

そこは時刻の底、深い闇であった。

Gは燐寸を何本も燃やした。

燃え尽きると次のを擦った。

ただ燃え尽きるのを見ていた。そのうちその小さな炎の中にKが現われた。Kは衰弱した体でなお立とうとしていた。見ていると炎の中のKの顔が黒くなった。焦げた紙屑だ。《崩れていくKの顔。》Gは無気味になってもそれから最後の一本をゆっくり擦った。Kの素顔を確かめるように。《炎。》指の腹を焼き燐寸の変わっていく様をGは痛む指を嚙んで見詰めた。軸の油の焦げる微かな音を聞きながら煙とともにふわりとKが舞い立つのを感じた。Gはぎくり僅かの間だけ身を構えていた。けれども肩に力を入れた状態はそれほど続くものではなかった。深い闇に一瞬のめったGは急いで目をあげた。闇の中で自分の呼吸を聞くのは寂しいことである。ゆらめく炎

の消えた後、ぼんやりとした雲がひろがりだしGは皮膚の裏側の壁面いっぱい古い油のついた重さを味わった。燐寸箱は空である。それからGは自分の内で何事かが始まるうとしているのを幽かに感じた。

ある朝のことである。黒服のKがGを連れに来て暗箱の部屋に招き入れた。Gは数日後にやつと身を縮めればよいとおもいついた。と狭い部屋がにわかに広くなった。Gは高い天井を見上げながら自分が夢見たことよってKに誘われたいきさつを反芻していた。一本のびんと張られた針金の光るのを見付けて身を起こしそろそろと近寄り攪むと身を乗せてみた。Gは針金を伝って行ったり来たりした。Gの神経も光って来た。それでも無事渡り終えられるとかえって興味を覚えた。以来終日針金渡りをしたのであるが闇から指示する声が聞こえそれに従って足を上げたり逆立ちしたりしだした。Gはその指示に抵抗を感じただけれども従うことよって容易に渡れたので次第に指示を受け入れていった。すると今度はGはGで己の意志を抑える結果になった。その状態で来る日来る日を針金の上で迎えたのだった。Gはひたすら針金の先端を凝視した。そこに表情が写った。それがまたGの内部で変形した。力つきた夜Gは転落した。抑えられた夢が裂けた皮膚から湧き出す血のように盛り上がり碎けた。下にはKが居た。仰向いたKの黒い顔に鮮血の夢がぼたぼた落ちる。Gもまた巨大な影の固まりとなって落ちたのだ。Gはそのため重い声どもに一時詰め寄られた。GにとってはKが下に居たこと事体が不思議であり驚きであった。Kに向かって真逆様に落ちながらKに《どけどけ》と叫ぶのがやつとであった。一人になったと

きGは死体のような己の影を遠くへ投げた。床の染みと化したKの影はGの内から消えなかった。GはKの影を抱えた。Gはそうした上で夢を押し開いてみようとした。夢には光景がなかった。黒い塊のみ残っていた。それから暫くたったある日Gは駅の構内の細い通路にいてちょうど視線を階段の方へ向けたときに下りかけているKの斜め横の姿を見た。Gは呼吸詰まるおもいでKを見直した。Kは下へ向かつていた。上から見るとKは階段を下り切っていてゆっくり左へ曲ろうとしているところであった。Gは声を掛けずにKの後から駆け下りた。風が強かった。Gは風に逆った。Gが最後の一段蹴って左へ勢いよく曲ってKの姿を探すと、Kはそこには居なかった。仕方なくGはホームの先へ行くことにした。Kは柱の陰で一人煙草を喫っていた。そのKは数分前のKとは違っていた。痩せてしまつて棒杭に急変したKからは余熱が伝わつて来た。GはKから目を離さない。KはKでGを見返して微笑み迎えた。冷えた微笑、とGはおもった。GとKとは電車の来る間わずかばかりの言葉を交した。電車が来るとKは煙草をその場に捨て靴で踏み潰した。その上で先にKが乗り込んだ。Gは後に続いた。Kは坐っていて目を閉じていた。GはKを確かめた上でドアの近くにKに背を向けた格好で立った。電車は街中を騒音あげ突き切っていた。あ、Kは過去そのもの、とGは窓外の風景とは別におもった。暫くしてふいっとKの方を見る。Kは眠っているらしかった。声の届く位置である。もう一度声を掛けようか、一寸躊躇したが、結局GはKに声を掛けずに電車を下りた。その頃からGの気持がぐしゃりとして来て胸が押され意識が歪み出した。なぜまた急に？ Kと会う前には起こらなかったことだ。いつかGはK

の影と歪んだ意識とを結びつけていた。Kの存在がGの内に歪みをもたらすのだとすればKの存在はGにとって何か、Gはふくれあがった内部に圧倒され出した。前方に廃屋が一軒、その前通り過ぎてから路上の小石にさえKの顔を見たのだ。Gの感覚の先端でGの影でない影がちらちら燃えて動くのでGにとっては極めて煩しい存在なのであるが意志によってさえ切り離せなかった。それからしばらくして、また駅の構内の階段のところでGはKを見掛けた。KはGに気付かぬ様子だった。やはりKは階段の下り口に立っていた。Gが近づくとKは風に吹かれ紙屑のように転がり下りた。GはKを追った。Kの背が膨らむ。Kは下り切るとくると左へ曲りそのままぐいぐいホームの先端まで行った。その日は厚い雲に被われた息苦しいほど空気の淀んだ日で、Kは止まると空を見上げた。Kに迫り付くとGも空を仰いだ。そこに見たのは次第に速度を増す厚い雲の流れであって睡魔が意識を包むのに似ているとおもったGであるがそのとき暗雲を裂いて小さな光体が上って雲間に見え隠れする一瞬を見た。(あれは!) Gは短く叫ぶ。光体が没した雲のあたりを見ていると、ライトを点けた電車がホームに入って来た。傍のKが勢いよく唾を吐き棄てた。車輛は空いていた。Kの姿は溶け込んでしまったようにおもえた。変だぞ。変だ。Gは目で車内を探した。見当たらぬ。けれどもこの車輛に居るはずだとおもい直したGはいつもの通りドア近くに立ち外を見はじめた。その日もGはKと会ったことで気持が歪み出した。しかもその作用は時間のたつほどに強まっていった。Gは苦笑もできずに目を泳がせた。Gの視線が濃い陰を落すビルの一角に固定した。ビルのある階のベランダに人影が動いていた。その人影が手

摺に寄りかかり手を延ばした。と姿勢が急に變化、崩れた。見えざる魔の手に引き寄せられるようにずるり上半身が下へ移動し手摺に腹部が当たったとき動きが停止した。Gの内に鋭い叫びが走り抜けた。一種の危うさを覚えた。不安の影が浮かんた。その小さな光景はGの内で身をへし折った人影の静止した状態として固着した。いつかGの目はKの姿を探していた。Kは見当たらぬ。その間にも電車は速度を早めて駆けていた。Gはその日空間を飛ぶおもいに浸った。

数日後の夜、GはKと会ったのであるが、そのときのKは闇を背に棒のように立っていた。Gはすぐ燐寸の棒を連想した。Kの様子がそれまでと違って映ってその夜のKとの交渉はGに一段と暗いおもいを生じさせたのである。Gは暗い湖水に浸かっている印象をいまでもおもい出すことができる。Kはコートの裾をひらひらさせて傘をステッキがわりにGへと近づいて来た。おやっ？ Gはそのときおもった。Kの方からGを誘うような具合であったからGは一瞬とまどった。が次にKと並び木立ちの下を歩いていて背にひんやりするものを感じながら言葉を交わしもしせずにいた。するとGの胸にKへの反発が生じて来た。最初のうちGは抑えていた。それがすぐに抑え切れなくなった。抑え切ろうとすると内深くから揆ねてくるものがあつた。GとKが歩いている道は雨水の流れ下るゆるやかな登り坂で小石の多い道であつた。Kはそのうちに先に立ち一人急ぎだした。Kが左へ曲つたのでGはその場に立ち止まりKに声を掛けた。

「どこまで？」

Gの声は囁れていた。

「来てくれますね。」

Kは歩きながらGに細い声で言った。

「どこへ？」Gは繰り返した。するとKだ。

「僕が行くところまで。」

「ちょっと。僕にはよく分からない。」

「何が？」

Kは歩みかけた格好のまま静止した。

「そちらは、知っているのですか。この先のこと。」Gは早口にKの背に伝えた。

「いいではないか。僕は行く。」

重い時刻がゆるゆる過ぎる。

「行くさ。」

Kは鋭く言い放つとまた歩きはじめた。だが、Gは佇みKの後姿を見送った。Kの背に憤怒が背負われているようにおもわれた。途中で別れたことがGに寂しさを味わさせた。右に曲って目を上げると街の燈が見えた。Gは燈を見てほっとした。燈のひとつひとつを数えるように眺め渡すうちそこに生を感じた。

「KはKである。」

と、Gは夜空に浮かぶ未開封の手紙が折り重なって舞うのを見た。それがまた花火に包み込ま